



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 71

Nov. 2018

今号のトピックス

次期幹事が変わります。ご注意ください→ 2 ページ
 2018 年度の講演会のお知らせがあります→ 7 ページ
 日本植物分類学会第 18 回大会のご案内があります→ 9 ページ
**会費納入は 12 月末が期限です。長期間滞納されている方は、
 NL にお名前を掲載させていただきますのでご注意ください→ 15 ページ**

目 次

次期（2019-2020 年度）の幹事について	2
諸報告	
植物地理・分類学会の合流についてのご報告	3
植物地理・分類学会の 2017 年度会計報告と 資産の移譲について	3
2018 年度野外研修会（山形県月山方面）報告	5
お知らせ	
2018 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ	7
日本植物分類学会第 18 回大会（八王子大会）および 2019 年度総会のご案内	9
会計納入のお願いと会費滞納者の名前掲載について	15
寄稿	
シノニムリストをつくろう（1）まずは、それっぽいものを作る （付：シノニムリストの種類，YList の文献略号）.....	15
会員消息	20

次期 (2019–2020 年度) の幹事について

庶務幹事 田中 伸幸

次期 (2019–2020 年度) の幹事が決まりましたのでご報告いたします。次期の庶務幹事を国立科学博物館の海老原 淳さんにお引き受けいただきました。また、次年度から会計、図書、ニュースレター担当、ホームページ担当幹事も全て任期満了となりますので、以下のように交代になります。これに伴い、2019年1月1日から学会事務局の連絡先が次のとおりに変更されます。お間違えのないようご注意ください。

事務局・庶務幹事 (会務全般)

海老原 淳 (えびはら あつし)

〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館 植物研究部

電話 / ファックス : 029-853-8988/029-853-8401

電子メール : ebihara_at_kahaku.go.jp (_at_ を @ に置換してください)

会計幹事 (入会申込, 住所変更, 退会, 会費納入, 購読申込など)

厚井 聡 (こうい さとし)

〒576-0004 大阪府交野市私市 2000

大阪市立大学 理学部附属植物園

電話 / ファックス : 072-891-2681/072-891-7199

電子メール : skoi_at_sci.osaka-cu.ac.jp (_at_ を @ に置換してください)

図書幹事 (バックナンバー・文献閲覧の問い合わせ)

藤井 俊夫 (ふじい としお)

〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目

兵庫県立人と自然の博物館 自然・環境再生研究部

電話 / ファックス : 0795-59-2001

電子メール : fujii_at_hitohaku.jp (_at_ を @ に置換してください)

ニュースレター担当幹事 (ニュースレター原稿送付先)

山本 薫 (やまもと かおる)

〒238-0016 横須賀市深田台 95

横須賀市自然・人文博物館

電話 / ファックス : 046-824-3688/046-824-3658

電子メール : kaoru-yamamoto_at_city.yokosuka.kanagawa.jp (_at_ を @ に置換してください)

ホームページ担当幹事 (ホームページ・メーリングリストに関する問い合わせ)

阪口 翔太 (さかぐち しょうた)

〒606-8317 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院 人間・環境学研究科

電話 / ファックス : 075-753-6796/075-753-6694

電子メール : sakaguchi.shota.6a_at_kyoto-u.ac.jp (_at_ を @ に置換してください)

諸報告

植物地理・分類学会の合流についてのご報告

庶務幹事 田中伸幸

植物地理・分類学会の当学会への合流にともない、両学会の会計年度の相違や会員の移行を円滑に進めるための措置として、移行会員の初年度の年会費の減免について、2018年3月の金沢大会での総会にて全会一致でご承認いただきました。皆様のご理解、ご協力に対しまして、ここに改めてお礼申し上げます。

お陰様をもちまして、その後の合流に関する手続きも円滑に行うことができ、植物地理・分類学会から日本植物分類学会への財産無償譲渡合意書への両学会会長の署名をもって、終了致しましたことをここに報告申し上げます。当初、植物地理・分類学会で行われた移行についてのアンケート結果などから想定していた50名を上回る70名の植物地理・分類学会の会員が日本植物分類学会へ入会されました。会員の増加は、当学会にとって大変好ましいことでもあります。

植物地理・分類学会の中野真理子元会計幹事、綿野泰行元会長の会計報告(3-4ページ)にもありますように、この合意により植物地理・分類学会より合計846,195円が譲渡されましたが、このうち、植物地理・分類学会後援会の資産385,924円については、植物地理・分類学会で研究・教育・普及活動への顕彰事業活動に活用されてきたものです。従いまして、当学会への移譲後におきましても、植物地理学および植物分類学の研究・教育・普及活動における日本植物分類学会会員への顕彰事業活動に活用させていただきます。今後、この資金の活用に関しましては、次期執行部において、新たな賞の創設など検討いただくことになるかと思います。

一方、これも総会で全会一致のご承認をいただきました和文誌につきましては、田村実編集委員長、鈴木浩司和文誌編集長をはじめ、編集委員の皆様のご尽力により、すでにお手元に届いておりますように当学会より『植物地理・分類研究』が予定通り刊行されております。また、植物地理・分類学会で発行しておりました雑誌のバックナンバーにつきましては、当学会へ移譲される前に在庫の整理をしていただき、『北陸の植物』、『植物地理・分類研究』の在庫バックナンバーは各号10冊が譲渡されましたこと、ご報告いたします。

植物地理・分類学会の2017年度会計報告と資産の移譲について

植物地理・分類学会 2017年度会計幹事 中野 真理子

植物地理・分類学会 2017年度会長 綿野 泰行

植物地理・分類学会は2018年4月付で日本植物分類学会へ合流いたしました。最終年度の会計について、この日本植物分類学会ニュースレターの紙面を借りて決算を報告させていただきます。一般会計の残高460,271円および、後援会会計の残高385,924円につきましては、日本植物分類学会へ無償譲渡いたしました。なお、後援会資産385,924円については、植物地理学および植物分類学の研究・教育・普及活動において顕著な功績をあげられた日本植物分類学会会員への顕彰事業活動に使用しなければならず用途を指定するという条件で合意しました。

2017 年度会計報告 (2017 年 4 月 1 日～ 2018 年 3 月 31 日)

○植物地理・分類学会

収入 (A)	2,215,156 円	支出 (B)	2,446,949 円
会費	1,854,000	雑誌印刷費 (64-2, 65)	1,920,276
移行会員 2018 年会費	342,000	雑誌送料 (64-2,65)	113,838
バックナンバー売上	3,000	通信費	5,173
利息	0	英文校閲費 (2016,2017)	100,000
雑収入	3,456	編集補助費	0
総会参加費等	12,700	庶務事務費	120,146
		(内訳)	
		アルバイト (発送作業等)	8,000
		文具等	0
		封筒印刷費	29,160
		雑誌封入発送代行	66,192
		雑支出	16,794
		ニュースレター送料	58,466
		会議費	90,000
		自然史学会連合負担金	20,000
		サーバーレンタル代	0
		総会関係	
		運営費	7,050
		会場アルバイト	12,000

差引 (A-B) △ 231,793 円

植物地理・分類学会資産 (前年度繰越金 692,064 + △ 231,793) 460,271 円

○植物地理・分類学会後援会

収入 (A)	0 円	支出 (B)	102,336 円
剰金	0	選考会議費	50,000
前年度繰越金	488,260	授賞金	50,000
		受賞者旅費	2,000
		大会用消耗品	336

差引 (A-B) △ 102,336 円

植物地理・分類学会後援会資産 (前年度繰越金 488,260 + △ 102,336) 385,924 円

2018 年度野外研修会（山形県月山方面）報告

山脇 和也（三重県）

2018 年度の日本植物分類学会の野外研修会は、9 月 8 日～10 日の 2 泊 3 日で、山形県のほぼ中央に位置する西村山郡西川町大井沢、月山方面で行われた。東北植物研究会の沢和浩氏に全面的にお世話になった。日本海側多雪地帯の植物、湿性植物の観察を主な目的としたものである。7 月の大雨や、台風、前線などの影響を受け、実施が心配されたが、現地は特に問題ないようで、ひとまずは安心した。しかし、前線の影響で 3 日間曇りから雨の天気であった。

9 月 8 日（金）西川町月山沢（宿舎）～弓張り平～四ツ谷～月山沢（宿舎）

JR 山形駅に 12 時集合であったが、諸事情により少し遅れて出発し、西川町月山沢の宿舎のレストイン花笠に着く。13 時 30 分過ぎにマイクロバスで弓張平（約 600m）まで上がりパークプラザ周辺の公園の湿地を観察する。オモダカ、ヘラオモダカ、アブラガヤ、ヒメジソ、ミソハギなどが見られ、ホタルイ属の植物はミチノクホタルイだと説明を受ける。山道を下っていくと真っ赤なおいしそうなタマゴタケ、道ばたにハルゼミがジイジイと泣いて転がっていた。ポケットに入れて宿まで持ち帰った。部屋の中で刺激を与えるとジイジイ。オオバクロモジ、オオカメノキ、クロツル、ホウチャクソウ、クロバナヒキオコシ、イヌドウナ、ミヤマカンスゲ、葉の細い型のオクノカンスゲなどが観察できた。さらに下り、林道に出ると、ツリフネソウ、キツリフネ、ヤマブキショウマ、オタカラコウ、ウチワドコロ、ハンゴンソウ、オオハンゴンソウ、タマブキ、ミチノクヨロイグサ、ナンブアザミ、トチノキ、オノエヤナギ、シロヤナギなどがめだつた。雨がぱらついたり、日も出たりする天気の中、中部地方以西に住む参加者は北の植物についていろいろ語りながら、月山沢の宿舎へと下っていった。そして、早めの夕食を取り、希望者はマイクロバスで大井沢湯殿山神社例大祭（火渡り神事）に参加して、終了後そのすぐ近くの大井沢温泉に入浴して帰った。

9 月 9 日（土）宿舎～姥沢（月山登山口）～大門海沼～石跳川～県立自然博物館

夜大きな雨音が聞こえ、天気予報によると今日はかなり雨が降るということであった。当初の予定、姥沢からリフトに乗って姥ヶ岳を経由して石跳川沿いに自然博物館に下るという予定を変更して、姥沢から大門海沼を経由して石跳川まで下り、石跳川と出会いより少し当初の予定の下山道を少しさかのぼり、ガッサントリカブトとイデトリカブトの生育地まで行き、自然博物館へと下った。

宿舎出発時より、上下の雨具をつけ、姥沢でバスを降りる。幸い雨はほとんどやんでいて道路沿いを少し観察する。オオイタドリ、クロツル、ミチノクヨロイグサ、オオバセンキュウ、ツルニンジン、ゴマナ、ミヤマウラジロイチゴ、ダキバヒメアザミ、ウゴアザミ、樹木では、ミズキ、ウワミズザクラ、ハウチワカエデ、ブナ、ツノハシバミ、アオダモなどが観察できた。少しくだった大門海沼の湿地付近では、カラフトドジョウツナギ、ミノボロスゲ、オオカサスゲ、ウスイロオクノカンスゲ（にちがいないと織田二郎氏）、エゾシロネ、ミツガシワ、カメバヒキオコシ、アカバナ、ヒメヘビイチゴ、ミヤマツボスミレ、イヌトウバナ、ズダヤクシュ、シロバナカモメヅル、オオナルコユリ、シダ類では、オオメシダ、ミヤマメシダ、シラネワラビ、シノブカグマ、ホソバナライシダなど、樹木では、ミヤマニワトコ、ユモトマユミ、ヤマモミジ、キタノテツカエデなど。石跳川沿いに出てさかのぼると、エゾボウフウ、モミジカラマツ、チョウジギク、ミヤマダイモンジソウ、クロクモソウなどが出てくる。水に流されてほとんど葉のなくなっているフキユキノシタも見られた。ガッサントリカブトとイデトリカブトの違いの説明を沢氏より受ける。足下にはオニシ



参加者の多くが、その巨大な草丈に驚いたミチノクヨロイグサ（現地での呼称）

オガマがあった。さらに少し登ると湿地があり、晴れていれば展望の良いところだが、残念ながら土砂降りの中で昼食を取り、下山を始めた。湿地付近にはエゾオヤマノリンドウ、イワオトギリ、アキノキリンソウ、ミヤマタニタデ、ミゾホオズキ、コバイケイソウ、タテヤマスゲ、ノッポロガンクビソウ、ハクサンシャジン、オオヒゲナガカリヤスモドキ、ムカゴイラクサ、モウセンゴケ、コウライテンナンショウなどいろいろの説明を受け観察した。ブナの中には鋭い鋸歯を持つものがあった。県立自然博物館まで下山し、そのセミナー室で月山の四季についてDVDで学習する。6月～7月にかけてクロユリ、ミヤマウスユキソウ、ミヤマキンバイ、ミヤマキンポウゲ、ハクサンチドリ、ミネズオウ、アオノツガザクラ、エゾノツガザクラ、ミネザクラ、イワウメ、ヒナザクラ、キバナノコマノツメなどの高山植物が咲き乱れ素晴らしい所であることがわかった。季節を変えてぜひとも再訪したい所である。宿に帰って、今日は、別の近くの水沢温泉に入浴してから夕食となった。食事は朝夕ともにキノコたっぷりの郷土の鍋料理を頂いた。ぜひとも試食してみたかったシイタケよりもおいしそうなツキヨタケはなかった。月夜にはほど遠い真っ暗な曇天であったが、夕食後、誰かが採取してきたツキヨタケの観察を行った。ぼんやりとうす白く光って早く私を食べて下さいとさそっているかのようなようであった。

9月10日(日) 宿舎～大井沢湯殿山神社～合戦場湿原～大井沢自然博物館～宿舎～山形駅(解散)

再び湯殿山神社へ行き、神社の池や周りの湿地を観察した。ドクゼリ、ヘラオモダカ、ホソバノヨツバムグラ、ハイドジョウツナギ、リュウキンカ、タマミクリの果実、コウホネの花などが見られた。そこから合戦場湿原に向かった。途中の田の周りの林縁にオクトリカブトが生育していた。ここで改めて今まで見られた三種類のトリカブト類の説明を受けた。湿原に着くとヒメカイウが果実をつけていた。ヒツジグサ、ミズオトギリ、アギナシ、ホタルイ、ミチノクホタルイ、イヌタヌキモ、レンゲツツジ、サワヒヨドリ、ヤマドリゼンマイ、ニッコウシダなどが見られた。周辺には、ダキバヒメアザミ、オニアザミ、オオバセンキュウ、ハンゴンソウ、ホツツジ、ズミなどが生育していた。最後に、雨の中、大井沢自然博物館に寄った所、近くの山からもってこられたという、鋸歯の切れ込みの深いハゴロモミズナラとよばれるミズナラを見せてもらった。宿舎に帰り昼食を取り、山形駅まで送ってもらい解散となった。

中部地方以西の参加者がほとんどで、キタとかミチノクとかナンブとか名のつく東北地方以北や日本海側にしか見られない植物を多く見せてもらい、参加者は大変満足のようであった。

この研修会の開催にあたり、大変お世話になった東北植物研究会の沢和浩氏を中心に、県立自然博物館、西川町立大井沢自然博物館の皆様方に深く感謝いたします。



つかの間、雨がやんだ3日目の朝。2日目までずっとご案内いただいた、大井沢自然博物館の方々と一緒に記念撮影できず残念でした

(追記) 筆者は仙台に出て仙台港からフェリーで名古屋へ帰る予定だったので、山形研修会の復習もかねて、1日かけて東北大学の青葉山植物園を全コースを歩いた。八甲田山(2014年度野外研修会)でお世話になった米倉浩司氏にお会いできた。仙台港を出て福島原発を遠くに見ながら南下し、翌朝、伊勢湾の入口の伊良湖水道に入ったとき、西側すぐ手前に三重県の神島、さらにその西にちょうど1年前(2017)、台風に追われて脱出した研修会会場の菅島、答志島がくっきりと見えた。担当者の私は遠くから参加して頂いた皆様に改めて感謝し、予定の半分しか観察して頂けなかったことを深くお詫び申し上げる次第です。

お知らせ

2018年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 布施 静香

2018年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催いたします。今回は、6名の先生方にご講演いただきます。皆様お誘いあわせの上、ぜひご参加ください。なお、会場は大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただきます。

【日時】2018年12月15日（土）午前10時～午後4時40分

【プログラム】

- 10:00-10:05 ご挨拶 伊藤 元己（会長）
- 10:05-10:55 伊東 拓朗 「マンネングサ属の特異な生き様に着目した植物進化研究」
- 11:00-11:50 羽生田 岳昭 「分子系統地理学的なアプローチで探る海藻類の移入」
(11:50-13:10 昼食)
- 13:10-14:00 高山 浩司 「小笠原諸島南硫黄島の植物相とシマクモキリソウの再発見」
- 14:05-14:35 道盛 正樹 「しだとこけ談話会を礎にして」
(14:35-14:50 休憩)
- 14:50-15:40 山田 敏弘 「球果によるマツ属の分類と日本のマツ亜属の進化史」
- 15:45-16:35 塚腰 実 「岐阜県可児市から見つかった新第三紀中新世のショウガ目果実化石」
- 16:35-16:40 ご挨拶 林 一彦

【講演会場】大阪学院大学2号館地下1階2号教室（02-B1-02 教室）
〒564-8511 大阪府吹田市岸辺南2丁目36番1号（電話：06-6381-8434）

【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅、阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩5分。
交通アクセス <http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/campus/access.html>
キャンパスマップ <http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/campus/index.html>

【その他】

事前の参加申し込みは不要です。直接会場へお越しください。参加費は無料ですが、お茶代として1人100円のご協力をお願いします。

また講演会終了後、大阪学院大学職員食堂（17号1階）で懇親会を行います。懇親会の参加費は4,000円（院生・学部学生には割引あり）です。参加を希望される方は準備の都合がありますので、できるだけ事前に fuse_at_sys.bot.kyoto-u.ac.jp（_at_を@に置換してください）までご連絡ください。なお、当日申込も可能です。

【講演要旨】

「マンネングサ属の特異な生き様に着目した植物進化研究」

伊東 拓朗（京都大学大学院農学研究科）

ベンケイソウ科マンネングサ属は、多肉植物と呼ばれる一般に乾燥地に適応的な草本である。しかしながら、東アジア地域、特に高山が発達した様々な微細環境を有する台湾では例外的に湿潤で暗い環境にまで進出し、著しく多様化を遂げている。本講演ではその多様化プロセスの経緯を最新の研究成果

を基に紹介する。また形態的な可塑性が大きいため分類学的な取り扱いが難しいとされてきたマンネングサ属について、遺伝子解析によって続々と明らかになってきた新事実やその特殊な生態についても紹介する。

「分子系統地理学的なアプローチで探る海藻類の移入」

羽生田 岳昭 (神戸大学内海域環境教育研究センター)

外来生物 (移入種) の問題は深刻な環境問題の 1 つとなっています。海藻類の場合、大きな問題となっているのは日本沿岸への移入よりもその逆のパターンであり、多くの海藻類が日本周辺地域から世界各地へと侵入し、分布を拡大させています。分子系統地理学的なアプローチから海藻類の移入の起源や経路を探究した研究例として、食用として日本人には身近な存在であるワカメ (世界の外来生物ワースト 100 に含まれる) の例や、自生地よりも移入先で先に種として記載されていたアナアオサの例などを紹介します。また、東日本大震災の津波の影響により発生した漂流物に着生していた海藻類に関する研究についても紹介する予定です。

「小笠原諸島南硫黄島の植物相とシマクモキリソウの再発見」

高山 浩司 (京都大学大学院理学研究科)

南硫黄島は小笠原諸島の南部に位置する海洋島で、有史以来人が一度も入植したことがない世界的にも大変貴重な島である。周囲 7.5km、面積 367ha の小さな島であるが、標高の最高地点は 916m で伊豆・小笠原諸島の中で最高峰を持つ。亜熱帯小笠原諸島にありながら、山頂付近の雲霧帯には温帯性の植物も生育するという特徴を持つ。2017 年 6 月に東京都、首都大学東京、日本放送協会が連携して行われた南硫黄島自然環境調査に参加し、幻のラン、シマクモキリソウ (*Liparis hostifolia*) を 79 年ぶりに発見した。南硫黄島調査の様子を交えながら、シマクモキリソウの系統解析の結果を紹介する。

「しだとこげ談話会を礎にして」

道盛 正樹 (しだとこげ談話会)

「しだとこげ談話会」は、シダの分類に興味を抱いていた諸氏と田川基二先生が、昭和 25 年夏の採集行の際に、「シダを本格的に勉強するためには基礎から学ばなければ駄目だ。自分が講義をしてやろう。みんなが京都へくるのはたいへんだから自分が大阪へ行こう。」と、先生自身が申し出て発足した。以降、大阪・京都・奈良・兵庫などで例会や野外観察会を持ち、勉強の好きな人たちが自らの知識欲を満たし、親睦を深めている。良く続いている理由は、田川基二先生という優れた指導者と、その教えを受け止める人材がいたことにある。会の気風は今日もまだ生き続け現在に至っている。近年のコケ分野の活動について紹介する。

「球果によるマツ属の分類と日本のマツ亜属の進化史」

山田 敏弘 (大阪市立大学理学部附属植物園)

マツ属の系統は大きく、五葉松 (ストロバス亜属)、二葉松 (マツ亜属マツ節)、三葉松 (マツ亜属トリフォリア節) からなる。この 3 系統は、球果鱗片の外部形態で分類することができる。しかし、節以下の系統を反映した球果の特徴は明らかにされておらず、特にマツ節の球果は種レベルであっても、外部形態で分類することが難しい。私たちは最近、マツ属の球果鱗片の解剖学的特徴に基づいた分類法を提案したので、本講演ではそれを紹介したい。また、私たちは、日本産マツ属の系統分化史を化石記録に基づいて解明する研究を続けている。本講演では、クロマツとリュウキュウマツが、1600 万年前の中新世最温暖期以降に迎った歴史を解説する。

「岐阜県可児市から見つかった新第三紀中新世のショウガ目果実化石」

塚腰 実 (大阪市立自然史博物館)

岐阜県可児市の木曾川河床に分布する新第三紀中新世 (約 1850 万年前) の地層から、莢状の果皮の内部に多数の種子をもつ果実化石が発見された。種子は、表面の斜めの構造、凹んだ臍点、倒生、

operculum (臍点付近にある栓構造), chalazal chamber (合点に見られる空洞) の特徴がある。これらの特徴から、この化石は、ヨーロッパの新生界から多産する形態属 *Spirematospermum* と同定される。*Spirematospermum* の形態は、バショウ科とシヨウガ科の特徴をもつ。*Spirematospermum* は、ヨーロッパでは白亜紀から鮮新世までの地層で発見されるが、日本では現在のところ中新世のみから発見されている。化石の産出記録をみると、ツルガイ海峡が消滅後の漸新世にヨーロッパから東アジアに分布拡大したと考えられる。

日本植物分類学会第 18 回大会 (八王子大会) および 2019 年度総会のご案内

第 18 回大会会長 菅原 敬

日本植物分類学会第 18 回大会を、2019 年 3 月 6 日 (水) ~ 9 日 (土) の日程で、首都大学東京 南大沢キャンパス (東京都八王子市) にて開催いたします。皆様の参加を心からお待ちしております。

【本会場 (口頭発表, ポスター発表, 総会, 授賞式, 受賞記念講演, 公開シンポジウム)】

首都大学東京 南大沢キャンパス 1 号館 (口頭発表) ・ 8-9 号館 (ポスター発表)
(東京都八王子市南大沢 1-1)

詳しいアクセスは 13 ページならびに下記リンクをご参照ください。

https://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html

【各種委員会 (編集委員会, 評議委員会) 会場】

首都大学東京 南大沢キャンパス 8 号館大会議室

詳しいアクセスは 13 ページならびに下記リンクをご参照ください。

https://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/map.html

【日程】 2019 年 3 月 6 日 (水) ~ 3 月 9 日 (土)

3 月 6 日 (水)	午後	各種委員会, 評議員会 (8 号館大会議室)
3 月 7 日 (木)	午前	口頭発表 (大会発表賞エントリー者)
	午後	口頭発表 (一般) ・ ポスター発表
3 月 8 日 (金)	午前	口頭発表 (一般)
	午後	ポスター発表 (一般) ・ 総会 ・ 受賞講演
	夜	懇親会 (生協食堂)
3 月 9 日 (土)	午前	口頭発表 (一般)
	午後	公開シンポジウム 「東京の植物の今を語る (仮題)」

【第 18 回大会ホームページ】

発表・参加申込および発表要旨提出の方法や大会プログラムなど、第 18 回大会の情報を随時アップロードいたします。

<http://www.comp.tmu.ac.jp/jsps18/>

【問い合わせ先】

大会実行委員長：村上哲明

事務局長：加藤英寿

連絡先：日本植物分類学会第 18 回大会実行委員会

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京 牧野標本館内

TEL: 042-677-2440

E-mail: 18jsps@tmu.ac.jp

(お問い合わせの場合には、できるだけ電子メールをお使いください。メールのタイトルは、「大会問合せ」として下さい。)

【発表の要領】

●口頭発表

発表時間は、講演 12 分、質疑応答 3 分の計 15 分の予定です。口頭発表の際には液晶プロジェクターを使用しますが、発表用パソコンは各自でご用意ください。Apple 製品等、特殊な接続ケーブルが必要な場合は、各自でご用意ください。

パワーポイントのスライド作成にあたっては、色覚バリアフリープレゼンテーション法に関するサイト <http://cudo.jp/cbf/> を是非ご一読ください。

●ポスター

ポスター用ボードは、縦 180 cm x 横 90 cm のサイズです。貼り付け用の鋏などは、大会実行委員会で用意いたします。ポスターは、3 月 7 日 (木) 13 時までに貼り付けし、3 月 9 日 (土) 12 時までに撤去してください。

【発表・参加申込方法】

大会には日本植物分類学会会員・非会員を問わずにご参加いただけますが、口頭発表およびポスター発表の演者（実際に発表する方）は、特に大会実行委員会から依頼した場合を除き、会員に限ります。非会員の演者（実際に発表する方）は、申込と同時に日本植物分類学会への入会手続きをお願いします。発表・参加申込は、次のどちらかの方法で行ってください。

1) 電子メールでの申込

第 18 回大会ホームページ (<http://www.comp.tmu.ac.jp/jsps18/>) から、「発表・参加申込書」の Word または PDF ファイルをダウンロードし、それに必要事項を記入した後（あるいは、本ニュースレターの「発表・参加申込書」にしたがって必要事項を記入して）、メールのタイトルを「大会申込」として、第 18 回大会の専用アドレス 18jsps@tmu.ac.jp 宛てに添付ファイルで送信して下さい。添付ファイル名は、ご自身のフル名前をお使い下さい。送信してから 3 日経っても（土日・祝日を除く）受付の連絡メールが届かない場合は、メールの件名を「大会申込確認（参加者氏名）」とし、18jsps@tmu.ac.jp 宛てまでご連絡ください。

2) 郵送による申込

インターネットを利用できない方は、本ニュースレター案内に記載されている「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、下記まで郵送にてお送りください。その際には、締切日必着といたします。

郵送先：〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京 牧野標本館内
日本植物分類学会第 18 回大会実行委員会 宛

【大会参加・発表申込の締切日】

1) 演者（実際に発表する方）：発表・参加申込 / 大会・懇親会参加費、弁当代等振込

1 月 18 日 (金) 必着

2) 演者以外：参加申込 / 大会・懇親会参加費、弁当代等振込

2 月 1 日 (金) 必着

2 月 2 日 (土) 以降は大会・懇親会参加費が増額されますので、なるべくお早めにお申し込みください。また、2 月 2 日 (土) 以降は振込まず、当日参加をご利用ください。

【大会発表賞へのエントリー】

大会発表賞へのエントリーは、日本植物分類学会の会員で、パーマナント・ポストについていない研究者（年齢制限はありません）で、筆頭発表者かつ演者（実際に発表する方）本人に限ります。大会発表賞へエントリーされる方は、発表・参加申込書「8. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー」の項目で、「(1) する」を選択してください。

【発表要旨の提出】

発表要旨の原稿は、下記の作成例にしたがってマイクロソフト・ワードを用いて作成して下さい。A4 タテ（ワードのデフォルト）に 12 ポイントの MS 明朝あるいは MS ゴシックのフォントのみを用い、発表題目（MS ゴシック）、一行空白、発表者氏名（かっこ内に所属）、発表者氏名（英語）、一行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表をする演者の右肩に「*」を入れて下さい。また、発表要旨の本文は最大 650 字までとしてください。発表要旨に図表は使用できません。なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

作成した発表要旨のワード・ファイルは、電子メールの添付ファイル（ご自身のフル名前をファイル名として下さい）として、18jsps@tmu.ac.jp 宛てに送信して下さい。発表要旨の送信は、演者（実際に発表する方）が行い、電子メールのタイトルは「発表要旨（演者氏名）」として下さい。発表要旨を送信してから 3 日経っても、発表要旨受付の連絡メールが届かない場合は、メールの件名を「発表要旨受付確認（演者氏名）」とし、18jsps@tmu.ac.jp までご連絡ください。

ワードを用いて発表要旨を作成するのが困難な方、あるいは電子メールで発表要旨ファイルを送信するのが困難な方は、大会実行委員会まで早めにご相談下さい。

要旨例（A4 タテ）

南葛飾郡小岩村で新たに発見したムジナモ
 {一行空白}
 牧野富太郎*（東京大・理・植物）・東京太郎（首都大・牧野標本館）
 Tomitaro MAKINO, Taro TOKYO
 {一行空白}

私は明治 23 年 5 月 11 日、南葛飾郡の小岩村伊予田に赴いた。江戸川の土手内の田の中に一つの用水池があって、そこでムジナモを発見した。この植物は、・・・（650 字まで）

【発表要旨提出の締切】

1 月 25 日（金）24:00

【参加費】

●大会参加費（発表要旨集 1 冊代金を含む）

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1) 事前申込（2 月 1 日（金）までの振込） | 一般 4,000 円， 学生 2,000 円 |
| 2) 当日参加申込 | 一般 5,000 円， 学生 3,000 円 |

●懇親会参加費：

- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 1) 事前申込（2 月 1 日（金）までの振込） | 一般 7,000 円， 学生 4,000 円 |
| 2) 当日参加申込 | 一般 8,000 円， 学生 5,000 円 |

●3 月 7 日（木）、3 月 8 日（金）、3 月 9 日（金）の昼食弁当代 各 1,000 円

【参加費送金先】

郵便振替口座番号：00170-3-767949

口座名義：日本植物分類学会第 18 回大会実行委員会

郵便局備え付けの振替用紙にて、振込金額の内訳（大会参加費、懇親会参加費、弁当代〔注文する日付を明記〕等）を通信欄に必ず記入の上、ご送金ください（振込手数料はご自身でご負担ください）。**同封されている郵便振替用紙は会費納入用です。大会参加費は郵便局備え付けの用紙をご使用ください。**また、振込者と参加者は同一にしてください。参加申込の際に、振込日と振込郵便局をご記入いただきますので、振込を終えてから参加申込を行なってください。

銀行等から振込む場合は、ゆうちょ銀行の受取口座として下記内容をご指定下さい。

店名（店番）：〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）預金種目：当座 口座番号：0767949

【懇親会】

南大沢キャンパス内にある生協食堂で行います。

【昼食】

予約制で、お弁当（ルベソン・ヴェール製）を用意いたします。事前申込の際に一緒にお申込みください。なお、南大沢キャンパス内には、生協食堂と売店があります。また、南大沢駅（アウトレット・モール）周辺にも飲食店がありますが、特に週末は非常に混雑し、価格も高めです。

■大会参加の各締切

区分	項目	締切
発表する人 (演者)	大会参加費 / 懇親会 / 昼食弁当代の振込 一般 4,000 円 / 7,000 円 / 1,000 円 学生 2,000 円 / 4,000 円 / 1,000 円	発表申込より前
	発表・参加申込 電子メール・郵送	1月18日(金)
	発表要旨登録 電子メール	1月25日(金)
参加する人 (演者でない共同発表者を含む)	大会参加費 / 懇親会 / 昼食弁当代の振込 一般 4,000 円 / 7,000 円 / 1,000 円 学生 2,000 円 / 4,000 円 / 1,000 円	参加申込より前
	参加登録 電子メール・郵送	2月1日(金)
当日参加の人 (2月2日以降は当日参加をご利用ください)	会場受付で参加申込・支払 大会参加費 / 懇親会 一般 5,000 円 / 8,000 円 学生 3,000 円 / 5,000 円	

【宿泊施設】

宿泊に関しては各自でご予約ください。最近、都内の宿泊施設は常に込み合っていますので、お早めのご予約をお勧めいたします。会場最寄りの南大沢駅周辺に宿泊施設はありませんので、橋本駅周辺、多摩センター駅周辺が最も会場に近い宿泊施設がある場所になります。また、新宿駅、相模原駅、町田駅からも 30-40 分程度で南大沢駅まで来られます。

【託児について】

現時点で託児室の開設は予定しておりませんが、ご希望の場合は、12月末日までに大会実行委員会までご相談ください。複数の希望者がいらっしゃる場合は、開設を検討いたします。

【公開シンポジウム】

「東京の植物の今を語る」と題した公開シンポジウムを予定しております。一般公開で、参加無料です。詳細は大会ホームページや次号ニュースレターでお知らせいたします。

【大会会場へのアクセス】**1) 本会場（首都大学東京 南大沢キャンパス 1号館）**

京王電鉄の新宿駅（JR新宿駅と繋がっています）からは、京王線の特急あるいは準特急に乗って下さい（行き先はどこのもでもかまいません）。そして、調布駅で橋本行きの電車に乗り換えて、南大沢駅で下車して下さい（橋本行きの準特急の場合は、乗り換えの必要がありませんが、朝は非常に少ないです）。全ての電車が南大沢駅に停車します。新宿駅から南大沢駅まで40分程度です。

東海道新幹線で直接お越しの場合は、新横浜駅でJR横浜線の橋本行き、あるいは八王子行きの電車に乗り換え、さらに橋本駅で京王電鉄の新宿行きの電車に乗り換えて下さい。新横浜駅から南大沢駅まで約40分、橋本駅から南大沢駅までは約5分です。

飛行機をご利用の場合は、羽田空港あるいは成田空港から南大沢駅行（終点が南大沢駅、聖蹟桜ヶ丘駅と多摩センター駅の2駅を経由します）のリムジンバス（高速バス）があります。時間は、羽田から2時間程度、成田から2.5時間程度かかりますが、荷物が多いとき、宿泊のホテルが多摩センター駅（京王・小田急）周辺の場合は特に便利です。

京王電鉄・相模原線の南大沢駅の改札を出ると、右奥に首都大学東京の門（南門）とシンボルの「光の塔」が見えます。口頭発表の会場である1号館は「光の塔」がある建物です。駅から徒歩5分程度で会場にたどり着けます。

2) 各種委員会会場（首都大学東京 南大沢キャンパス 8号館 2階大会議室）、ポスター発表会場（8号館、9号館 1階）

8・9号館は、南大沢キャンパスの東側奥にある建物です。大会議室は8号館の最も9号館寄りにあります。南門から徒歩で10分弱かかります。

【大会会場付近の駐車場】

事前に許可を得ていない学外者が南大沢キャンパス内に自動車でご入構することはできません。また、南大沢キャンパス周辺には、アウトレット・モールの駐車場など公共駐車場が複数ありますが、特に週末には大変混雑します（入庫待ちの長い車の列ができます）。できるだけ公共交通機関をご利用ください。

編集後記

4年間、ニュースレター担当幹事を務めさせていただきました。みなさまのご協力のおかげで予定通り発行することができました。ありがとうございました。とくに原稿を依頼し、快く引き受けて執筆して下さった方々には心より感謝申し上げます。書籍を送ってくださった方もおられました。十分な書評ができたかはわかりませんが、いただいた書籍はみな楽しませていただきました。書籍をはじめ、原稿執筆の申し出やアイデアなどのご提供はたいへんありがたいものでした。

次号からは横須賀市自然・人文博物館の山本薫さんが担当になります。引き続き、みなさまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

日本植物分類学会第 18 回大会「発表・参加申込書」

必要事項をご記入の上、ニューズレターに記載の宛先まで郵送してください。
発表の申込締切は 2019 年 1 月 18 日（金）必着です。

1. 氏名（ふりがな、またはローマ字）：
2. 所属：
3. 所属の短縮表記：
4. 連絡先住所：〒
5. Tel & Fax:
6. E-mail アドレス：
7. 研究発表
する：(1) 口頭発表 (2) ポスター発表 (3) どちらでも良い
しない：(4) 発表しない (5) 共同研究者が発表する（実際に発表する方の氏名： _____)
8. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー：(1) する (2) しない
9. 発表タイトル：
10. 全発表者氏名・所属（実際に発表する方の氏名の右肩に * 印）：

11. 全発表者氏名のローマ字表記：

12. 現在求職中の表示の希望：(1) 希望する (2) 希望しない
13. 大会参加費（振込は 2 月 1 日まで。それ以降は当日参加となります）： _____ 円
一般 4,000 円 学生 2,000 円
14. 懇親会：(1) 参加する (2) 参加しない
15. 懇親会費（振込は 2 月 1 日まで。それ以降は当日参加となります）： _____ 円
一般 7,000 円 学生 4,000 円
16. 昼食弁当：(1) 3 月 7 日（木）1,000 円 (2) 3 月 8 日（金）1,000 円
(3) 3 月 9 日（土）1,000 円 (4) 申し込まない
17. 13, 15, 16 の合計金額： _____ 円
18. 振込郵便局名：
19. 振込日： _____ 月 _____ 日
郵便振替口座番号：00170-3-767949
口座名義：日本植物分類学会第 18 回大会実行委員会

会計納入のお願いと会費滞納者の名前掲載について

会計幹事 池田 啓・ニュースレター担当幹事 堤 千絵

今年も会費納入のお願いの時期がやってまいりました。以下のとおり、会費の納入をお願いいたします。また、4年以上会費を滞納されている方は、規約第10条(2)に基づき、除名を行っております。除名となりますと、総会ならびに本誌にて除名者としてお名前を掲載することになります。また来年度以降につきましては、3年以上滞納されている方は本誌にてお名前を掲載させていただき、注意喚起をさせていただきたいと思っております。そのような形でお名前を掲載するのは、こちらとしましてもできる限り避けたいと思っておりますので、すみやかな会費納入をお願いしたいと思います。今後も学会運営にご協力いただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。

・2019年度(2019年1～12月)の会費は2018年12月末までに納付しなければなりません(前納制)。本号封筒の宛名ラベルに「納入済み」年度が表示されています。2019年度分まで納入済みになるように振込をお願いします。

・同封された郵便振替用紙をご利用ください。振込先はこのページ左下にも記載してあります。

・本号封筒の宛名ラベルに「自動引落」と表示されている方は、振替で納付する必要はありません。

・適正な学会運営のために、皆様のご協力をよろしくお願いします。なお、長期滞納者に対しては、規約第10条(2)に基づき、除名を行っております。ご不明の点があれば、会計幹事までご連絡ください。

寄稿

シノニムリストをつくらう(1) まずは、それっぽいものを作る(付:シノニムリストの種類, YListの文献略号)

黒沢 高秀(福島大学共生システム理工学類)

はじめに

近年、分子系統学的研究が進んで、植物の種の系統関係や種内変異に関する知見が急速に蓄積しつつあります。分子系統学的手法は、分類学的形質が乏しい、いわゆる「分類の難しい種」や「変異の大きい種」とされた植物の解析で大きな力を発揮します。そこで明らかになった系統関係や種内変異に関する知見により、これまでの分類を見直す必要があることが判明することがあります。その様な知見に基づき分類学的再検討が行われ、これまでの分類が大きく見直された日本産の植物の例としてはカンアオイ属ウスバサイシン節(Yamaji et al. 2007)やモダマ属(Tateishi et al. 2008)などがあります。しかし、分子系統学の技術と命名法の知識の両方を備えた研究者がそれほど多くないこと、特に命名法に精通した研究者自体の数が少ないこともあり、せっかく得られた分子系統学的研究の成果が分類学的取り扱いに活かされていない例も多々あります。このような状況を改善するためには、分子系統学的研究を行っている研究者に命名法の知識を持ってもらうこと、および分子系統学の研究者と命名法に精通した研究者の共同研究を推進する仕組みを作ることが有効と思われれます。ここでは、前者を推進するため、シノニムリストの作り方を4回にわたって解説します(紙面の都合などにより不定期掲載になる予定です)。

シノニムリストは、分類学的研究の論文で「Taxonomic treatment」(分類学的取り扱い)の後に続く、学名や文献、そして英語に似ているけれど少し違う言語(ラテン語)の単語の羅列です。『改訂新版日本の野生植物』(大橋他 2015-2017)などのような本格的な図鑑によっては、簡略なシノニムリストが付さ

れていることがあります。シノニムリストは、一見するとなんだかよくわからない呪文のようですが、見方がわかるとその植物を巡る分類学的研究の歴史や学名をめぐるドラマがわかる情報の宝庫です。シノニムリストがつけると、明らかになった系統関係などにより新学名の提案などの分類学的取り扱いの変更が必要かどうかはわかるようになります。なるべく平易な文章になるよう心がけますが、どうしても命名法関連の用語を用いなければならないところがあります。わからない場合は、『国際藻類・菌類・植物命名規約（メルボルン規約）2012 日本語版』（日本植物分類学会国際植物命名規約邦訳委員会 2014）の命名法用語集やインターネットで調べて下さい。

この連載に合わせて、シノニムリスト作りの受講生を募集します（最大 5 名まで）。作ったリストをこちらで添削します。なお、添削前後のリストをこの連載に作成者氏名と共に掲載させていただくことがあります。希望者は黒沢 (kurosawa@sss.fukushima-u.ac.jp) まで、作りたい分類群名と共に申し込み下さい。多数の場合は、分子系統学的研究の実績がある方を優先させていただきます。

シノニムリストの種類

シノニムリストには、タイプ標本ベースと年代順の二つの書き方があります。

1. タイプ標本ベース（例はヒトツバイチヤクソウで、Shutoh et al. 2017 を一部改変したもの）

Pyrola subaphylla Maxim.

Pyrola subaphylla Maxim., Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Pétersbourg sér. 3 11: 433 (1867) and Mélanges Biol. Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Pétersbourg 6: 206 (1867); Miquel, Prolus. Fl. Jap.: 382 (1867); Maximowicz in Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Pétersbourg 18: 54 (1873); Franchet & Savatier, Enum. Pl. Jap. 1: 295 (1875); Makino, Bot. Mag. (Tokyo) 11: (451) (1897); Boissieu, Bull. Herb. Boissier 5: 923 (1897); Matsumura, Index Pl. Jap. 2(2): 450 (1912). —*Pyrola rotundifolia* L. var. *incarnata* (Fisch.) DC. f. *subaphylla* (Maxim.) Makino, Bot. Mag. (Tokyo) 27: 24 (1913); Makino & Nemoto, Fl. Jap.: 433 (1925); Makino & Nemoto, Fl. Jap. rev. ed.: 860 (1931). —*Pyrola japonica* Klenze ex Alef. var. *subaphylla* (Maxim.) Andres, Oesterr. Bot. Z. 64: 245 (1914); Andres in Bull. Jard. Bot. Buitenzorg. ser. 3 14(1): 4 (1936); Hara in Bot. Mag. (Tokyo) 50: 490 (1936), as "(Maximowicz) Hara"; Hara in Bot. Mag. (Tokyo) 52: 625 (1938); Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 5 (1949); Honda, Nom. Pl. Jap.: 255 (1939); Kitamura & Murata, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. I, Symp.: 238 (1957); Yamazaki in Satake et al., Wild Flow. Jap. Herb. Pl. 3: 5 (1981); Takahashi in Iwatsuki et al., Fl. Jap. 3a: 67 (1993). —*Pyrola japonica* Klenze ex Alef. f. *subaphylla* (Maxim.) Ohwi [Fl. Jap.: 875 (1953), nom. nud.] Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo 33: 81 (1953); Honda, Nom. Pl. Jap.: 185 (1957); Honda, Nom. Pl. Jap. ed. emend.: 185 (1963); Ohwi, Fl. Jap. rev. ed.: 1011 (1965); Ohwi, Fl. Jap. ed. Engl.: 691 (1965); Sugimoto, Keys Herb. Pl. Jap. I, Dicot.: 406 (1965); Ohwi, Fl. Jap. new ed. rev. enl.: 1011 (1975); Ohwi & Kitagawa, New Fl. Jap.: 1138 (1983). —Syntypes: JAPAN. Hokkaidō, Hakodate, Siginope ("ins. Yeso, circa Sigi-nope"), Maximowicz s. n., 19 July 1861 (K463688! & GH61386 photo!); Mt. Fuji ("Fudzji"; Nagano Prefecture ("prov. Senano").

Pyrola incarnata (DC.) Fisch. ex Freyn var. *japonica* auct. non (Klenze ex Alef.) Koidz., Fl. Symb. Orient.-Asiat. 74 (1930); Koidzumi, ibid., p. p.; Nemoto, Fl. Jap. suppl.: 549 (1936), p. p.

タイプが同じ学名を、発表順に一段落につなげるものです。ただし、正名と認める学名は一番最初の段落の、一番最初に持ってきます。タイプが異なる学名は発表順に並べます。この型のリストは、(1) タイプと学名の関係がわかりやすい、(2) 学名同士の関係（不要名 *nomen superfluum*, 新名 *nomen novum* など）がわかりやすい、という利点があります。一方で、(1) 同じランクの学名の先取権が多少わかりにくい、(2) 命名法に関する判断をする必要があり、作成に、より手間がかかる、などが欠点です。Blumea, Systematic Botany Monographs など、最近の海外の主要雑誌はこちらが主流です。今回の連載では、こちらを作成することにします。

2. 年代順

Pyrola subaphylla Maxim.

Pyrola subaphylla Maxim., Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Pétersbourg sér. 3 11: 433 (1867) and Mélanges Biol. Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Pétersbourg 6: 206 (1867); Miquel, Prolus. Fl. Jap.: 382 (1867); Maximowicz in Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Pétersbourg 18: 54 (1873); Franchet & Savatier, Enum. Pl. Jap. 1: 295 (1875); Makino, Bot. Mag.

(Tokyo) 11: (451) (1897); Boissieu, Bull. Herb. Boissier 5: 923 (1897); Matsumura, Index Pl. Jap. 2(2): 450 (1912). —Syntypes: JAPAN. Hokkaidō, Hakodate, Siginope (“ins. Yeso, circa Sigi-nope”), *Maximowicz s. n.*, 19 July 1861 (K463688! & GH61386 photo!); Mt. Fuji (“Fudzi”); Nagano Prefecture (“prov. Senano”).

Pyrola rotundifolia L. var. *incarnata* (Fisch.) DC. f. *subaphylla* (Maxim.) Makino, Bot. Mag. (Tokyo) 27: 24 (1913); Makino & Nemoto, Fl. Jap.: 433 (1925); Makino & Nemoto, Fl. Jap. rev. ed.: 860 (1931)

Pyrola japonica Klenze ex Alef. var. *subaphylla* (Maxim.) Andres, Oesterr. Bot. Z. 64: 245 (1914); Andres in Bull. Jard. Bot. Buitenzorg. ser. 3 14(1): 4 (1936); Hara in Bot. Mag. (Tokyo) 50: 490 (1936), as “(Maximowicz) Hara”; Hara in Bot. Mag. (Tokyo) 52: 625 (1938); Hara, Enum. Sperm. Jap. 1: 5 (1949); Honda, Nom. Pl. Jap.: 255 (1939); Kitamura & Murata, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. I, Symp.: 238 (1957); Yamazaki in Satake *et al.*, Wild Flow. Jap. Herb. Pl. 3: 5 (1981); Takahashi in Iwatsuki *et al.*, Fl. Jap. 3a: 67 (1993).

Pyrola incarnata (DC.) Fisch. ex Freyn var. *japonica* auct. non (Klenze ex Alef.) Koidz., Fl. Symb. Orient.-Asiat. 74 (1930); Koidzumi, *ibid.*, p. p.; Nemoto, Fl. Jap. suppl.: 549 (1936), p. p.

Pyrola japonica Klenze ex Alef. f. *subaphylla* (Maxim.) Ohwi [Fl. Jap.: 875 (1953), nom. nud.] Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo 33: 81 (1953); Honda, Nom. Pl. Jap.: 185 (1957); Honda, Nom. Pl. Jap. ed. emend.: 185 (1963); Ohwi, Fl. Jap. rev. ed.: 1011 (1965); Ohwi, Fl. Jap. ed. Engl.: 691 (1965); Sugimoto, Keys Herb. Pl. Jap. I, Dicot.: 406 (1965); Ohwi, Fl. Jap. new ed. rev. enl.: 1011 (1975); Ohwi & Kitagawa, New Fl. Jap.: 1138 (1983).

学名を1つ1つ発表順に並べるものです。タイプが同じ学名もつなげることはありません。この型のリストは、(1) 同じランクの学名の先取権がわかりやすい、(2) 命名法に関する判断をする必要はなく、機械的に年代順に並べれば良いので、作成がより簡単、という利点があります。日本ではこちらが主流のようです。

植物分類学分野の他分野との引用競争対策

Kew Bulletin, Blumea など一部の雑誌では、植物分類学の文献の引用回数を増やすため、シノニムリスト中の文献の引用を本文中の引用方法に準ずることを推奨しています。この書き方だと、以下ようになります (タイプ標本ベース)。引用文献欄に Maximowicz (1867a) などが並びます。

Pyrola subaphylla Maxim.

Pyrola subaphylla Maximowicz (1867a: 433); Maximowicz (1867b: 206); Miquel (1867: 382); Maximowicz (1873: 54); Franchet & Savatier (1875: 295); Makino (1897: (451)); Boissieu (1897: 923); Matsumura (1912: 450). —*Pyrola rotundifolia* L. var. *incarnata* (Fisch.) DC. f. *subaphylla* (Maxim.) Makino (1913: 24); Makino & Nemoto (1925: 433); Makino & Nemoto (1931: 860). —*Pyrola japonica* Klenze ex Alef. var. *subaphylla* (Maxim.) Andres (1914: 245); Andres (1936: 4); Hara (1936: 490), as “(Maximowicz) Hara”; Hara (1938: 625); Hara (1949: 5); Honda (1939: 255); Kitamura & Murata (1957: 238); Yamazaki (1981: 5); Takahashi (1993: 67). —*Pyrola japonica* Klenze ex Alef. f. *subaphylla* (Maxim.) Ohwi [(1953a: 875), nom. nud.] (1953b: 81); Honda (1957: 185); Honda (1963: 185); Ohwi (1965: 1011); Ohwi (1965: 691); Sugimoto (1965: 406); Ohwi (1975: 1011); Ohwi & Kitagawa (1983: 1138). — Syntypes: JAPAN. Hokkaidō, Hakodate, Siginope (“ins. Yeso, circa Sigi-nope”), *Maximowicz s. n.*, 19 July 1861 (K463688! & GH61386 photo!); Mt. Fuji (“Fudzi”); Nagano Prefecture (“prov. Senano”).

Pyrola incarnata (DC.) Fisch. ex Freyn var. *japonica* auct. non (Klenze ex Alef.) Koidzumi (1930: 74), p. p.; Nemoto (1936: 549), p. p.

シノニムリストの作り方1 「まずは、それっぽいものを作る。」

文献を一つ一つ参照しながら作ってゆくのシノニムリストの本来の作り方です。ただし、最近では信頼のおけるデータベースがあり、それらを使うと大幅に作業が楽になり、リストを網羅的かつ正確にすることができます。日本の植物では、Flora of Japan や YList など信頼性の高い便利なデータベースを使うことができます。最初にこれらを使って、シノニムリストのたたき台 (それっぽいもの) を作る方法を解説します。合わせて YList に出てくる文献略号と正式名称、今回使用したインターネットのページについても後述します。

1-1. インターネットの Flora of Japan (注: 2018年11月3日現在アクセスできません) のページのシノニムリストをもとに、学名をタイプ標本ベースのシノニムリストの形に並べる。学名はイタリックにする。その際、同じ種形容語 (あるいは種内分類群形容語) であれば、同じタイプにもとづくと考えて、仮に並べる (後で、本当に同じタイプにもとづくか、確認する必要がある)。意味のわからない略号

- などは、省かないで残しておく。インターネットのページは後に一覧にしていますので参照のこと。
- 1-2. YList に出てくる学名で、上記にないものがあれば付け加える。タイプの情報があれば、付け加えておく（後で、本当にタイプであるか、確認する必要がある）。
 - 1-3. 文献の著者を名字に統一する。ただし、学名に結びついている場合は IPNI の Authors に従って氏名の略号を用いる。Flora of Japan はだいたいその通りになっている。
 - 1-4. 文献の略号を統一する。著書の場合は Taxonomic Literature または IPNI の Publications の略号に統一。雑誌の場合は BPH online または IPNI の Publications の略号に統一。Flora of Japan はだいたいその通りになっている。
 - 1-5. 雑誌の場合および分担執筆の場合は著者と文献の間に「in」をつける。著書の場合は著者と文献の間に半角「,」をつける。
 - 1-6. その他、下記のクワガタソウとシロバナクワガタソウ（コクワガタソウ）の例に従って、細かい体裁を整える。ただし、タイプの部分は後で整えるのでコピーペーストしたままで良い。
 - 1-7. Flora of Japan と YList の見解が異なっている場合は、どちらかの見解を採用する（仮にでも良い）。採用しなかった見解は、一番最後につけ、灰色に網掛けしておく。

クワガタソウ

Veronica miqueliana Nakai

Veronica miqueliana Nakai in Bot. Mag. (Tokyo) 32: 224 (1918); Yamazaki in J. Jap. Bot. 31: 296 (1956); Yamazaki in J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot. 7(2): 156 (1957). —*Veronica cana* Wall. var. *miqueliana* (Nakai) Ohwi in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo no. 33: 85 (1953). —*Veronica cana* Wall. subsp. *miqueliana* (Nakai) Elenevsky in Byull. Moskovsk. Obshch. Isp. Prir., Otd. Biol. 19: 153 (1974). —Syntypes: Tokyo, Mt. Odake (J. Matsumura & S. Matsuda, TI); Kanagawa, Mt. Oyama (J. Matsumura & S. Matsuda, TI); Hakone (G. Koidzumi, TI); Fukushima (Iwashi, Aimine (G. Koidzumi, TI); Nagano, Mt. Togakushi (J. Matsumura, TI); Karuizawa (F.C. Greatrex, TI); Gunma, Mt. Akagi (B. Hayata, TI); Tochigi, Nikko (J. Matsumura, TI); Mt. Dantai, Nikko (K. Sawada, TI).

シロバナクワガタソウ（コクワガタソウ）

Veronica miqueliana Nakai f. **leucantha** Nakai

Veronica miqueliana Nakai f. *leucantha* Nakai in Bot. Mag. (Tokyo) 45: 133 (1931). —Type: Kanagawa, Hakone, in silvis montis Kamiyama, ubi vulgarissima (T. Nakai, TI).

Veronica cana Wall. ex Benth. var. *takedana* Makino in Bot. Mag. (Tokyo) 21: 32 (1907, njn); Ohwi, Fl. Jap.: 1047 (1953). —Type: not designated, hab. cited.: 'the mountains in the southern parts of Japan'.

(以上, Nemoto et al. unpublished より改変)

YList の文献略号：BPH や Taxonomic Literature の略号：正式名称

頻繁に出てくる文献が独自の略号（文献名の単語のイニシャル）で記されているので、注意が必要です。B.M.T., J.J.B. など、一部は Hara (1948–1954) で用いられていたものと同一です。

A.M.B.L.-B.: Muquel in Ann. Mus. Lugd.-Bat. (1863–1870): Muquel in Annales Musei Botanici Lugduno-batavi (1863–1870)

A.P.G.: Acta Phytotax. Geobot.: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 植物分類, 地理

B.A.S.S.-P.: Bull. Acad. Imp. Sci. Saint-Petersbourg: Bulletin de l'Académie Impériale des Sciences de Saint-Petersbourg. St. Petersburg

B.M.T.: Bot. Mag. (Tokyo): Botanical Magazine, Tokyo 植物学雑誌

E.P.J.: Franchet & Savatier, Enum. Pl. Jap. (1875–1879): Franchet & Savatier, Enumeratio Plantarum in Japonica Sponte Crescentium (1875–1879)

E.S.J.: Hara, Enum. Sperm. Jap. (1948–1954): Hara, Enumeratio Spermatophytarum Japonicarum (1948–1954) 日本種子植物集覧

F.R.P.S.: Fl. Reipubl. Pop. Sin.: Flora Reipublicae Popularis Sinicae 中国植物志

J.F.S.U.T. 3: J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. 3, Bot.: Journal of the Faculty of Science, University of Tokyo, Section III. Botany 東京大学理学部紀要第三類植物学

J.J.B.: J. Jap. Bot.: Journal of Japanese Botany 植物研究雑誌

今回使ったインターネットのページ

BPH Online (<http://www.huntbotanical.org/databases/show.php?1>, 2018年11月3日確認)

植物学関係の雑誌の一覧である『*Botanico-Periodicum-Huntianum* (BPH)』シリーズ (Lawrence et al. 1968, Bridson 1991, 2004) の内容が検索できます。

Flora of Japan Database (日本植物誌データベース) (<http://foj.c.u-tokyo.ac.jp/gbif/>)

日本の植物誌『*Flora of Japan*』のうちのシダ植物・裸子植物、双子葉植物離弁花類の後半、合弁花類の前半、後半を扱った4分冊 (I, IIc, IIIa, b) (Iwatsuki et al. 1993, 1995a, 1995b, 1999) と同じ内容が掲載されており、新学名を発表した文献に関してかなり精度の高いシノニムリストが含まれています。残念ながら2018年11月3日現在アクセスできません。

IPNI (The International Plant Names Index) (<http://www.ipni.org/index.html>, 2018年11月3日確認)

植物の学名 (Plant Names), 学名の著者 (Authors) や分類学に関する著書 (Publications) などの便利なインデックスがあります。

Taxonomic Literature (<http://www.sil.si.edu/DigitalCollections/tl-2/>, 2018年11月3日確認)

植物分類学の著者や著書の解説である『*Taxonomic Literature*』(Stafleu and Cowan 1979–1988, Stafleu and Mennega 1992–2000, Dorr and Nicholson 2008–2009) の内容が検索できます。検索されるのは掲載されたページで、画像を読むこととなります。

YList (<http://ylist.info/index.html>, 2018年11月3日確認)

日本の維管束植物の学名と和名のデータベース。新学名を発表していない文献の情報もかなり含まれています。

今後の予定

- 2 「定番文献を付け加える。」
- 3 「国内文献とつきあわせる。」
- 4 「外国文献とつきあわせる。」

謝辞

この連載は、福島大学の教員や学生向けに行ったシノニムリスト講習会の資料をニュースレター向けに書きなおしたものです。ニュースレターでの連載を勧めて下さった兼子伸吾氏、掲載をご快諾いただいた堤千絵氏、ヒトツバイチャクソウおよびクワガタソウ類のシノニムリストの使用をお許しいただいた首藤光太郎氏と根本秀一氏に感謝いたします。筆者はそれなりに勉強してきたつもりですが、命名法は奥が深く、間違いや思い違いが含まれているかもしれません。お気づきの点がありましたら、お知らせ下さい。

引用文献

- Bridson, G. D. R. (ed.). 1991. B-P-H/S: *Botanico-Periodicum-Huntianum/Supplementum*. Hunt Institute for Botanical Documentation, Pittsburgh.
- Bridson, G. D. R. 2004. BPH-2: *Periodicals with Botanical Content*. Hunt Institute for Botanical Documentation, Pittsburgh.
- Dorr, L. J. and D. H. Nicolson. 2008–2009. *Taxonomic Literature. A Selective Guide to Botanical Publications and Collections with Dates, Commentaries and Types*, suppl. VII–VIII. A. R. G. Gantner Verlag K. G., Ruggell.
- Hara, H. 1948–1954. *Enumeratio Spermatophytarum Japonicarum, I–III*. Iwanami Shoten, Tokyo.
- Iwatsuki, K., D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 1999. *Flora of Japan*, vol. IIc, *Angiospermae Dicotyledoneae Archichlamydeae* (c). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., M. Kato and T. Yamazaki. 1995a. *Flora of Japan*, vol. I, *Pteridophyta and Gymnospermae*. Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., T. Yamazaki, D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 1993. *Flora of Japan*, vol. IIIa, *Angiospermae Dicotyledoneae Sympetalae* (a). Kodansha, Tokyo.
- Iwatsuki, K., T. Yamazaki, D. E. Boufford and H. Ohba (eds.). 1995b. *Flora of Japan*, vol. IIIb, *Angiospermae Dicotyledoneae Sympetalae* (b). Kodansha, Tokyo.

